

5、戦争否定

道徳と知恵を否定して、自然のままに生きることを主張した老子は、また、水の徳を賛美する。それは、水が、従順にして逆らわず、柔弱にして低きにつく性質をもっているからである。

たしかに、水は、従順にして柔弱であり、人のきらう低きに位置してはいる。それは、惨めな敗者を思わせるのであるが、果して、そうであろうか。老子の立場からすれば、否である。

さて、さきの、島根県西部を中心に襲った集中豪雨は、百十余名の痛ましい犠牲者を出す、同県では戦後最大の惨事となった。柔弱のはずの水が、裏山をつき崩して土砂流となり、はらんした濁流が、人も車も家も押し流してしまった。また、引き続き襲ってきた台風五号は、雨台風となり、その被害は、中部・関東一円に及んだが、山梨県では、わずか幅二米の川のはらんで、死者を出す惨事をひき起こしている。

この、島根豪雨や台風五号でもわかるように、柔弱



原 爆 慰 霊 碑

なはずの川水が、大きな災害を起こしたのは、それは、川が、低きにあつて、百川の水を集めているからである。老子が、水の徳を賛美した理由はここにある。川水は、ただ、川の流路に従い低きにつくだけであるのに、山をも押し崩す大きな力をもっている。世の中も同じことで、人を押しつけて上に立っても、誰も王者とは認めない。むしろ、逆に、人の後へ下へとへりくだる者こそ、王者たるの力を認められるものである。老子のいう「弱は強に勝ち、柔は剛に勝つ」とは、この意味である。

老子の、この、柔弱なるものは勝つ、という逆説的言説には、人みな、静かに耳を傾けなければなるまい。なぜなら、原水爆を保有する強国が、それを持たない弱国を強引にねじ伏せて勝つのは、本質的に異っているからである。老子のいわゆる、柔弱なる者が勝つ、というその中身は、水が低きにつくように、自然にして勝つということで、それは、何の抵抗も争いもなく勝つのである。その、無抵抗・不争の勝利を、更に、一步深めるとき、それは、戦争否定の考えにつながっていくはずである。ここに、老子と他の思想家或いは為政者たちとの、根本的な違いがあると思うのである。

かくて、老子は、水の徳のように、従順柔弱に生きることを主張して、戦争のない平和な世界の出現を希求したのである。